
銀婆沙! ~ 銀の侍と蒼紅と戦国武将 ~

坂田金時

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀婆沙！〜銀の侍と蒼紅と戦国武将〜

【Nコード】

N4286Y

【作者名】

坂田金時

【あらすじ】

ある日、銀さん達の目の前に現れた別世界の戦国武将達。彼らの内3人は銀さん達の知り合いにそっくり！？銀さん達は武将達を数人あずけるために護影屋と言う隠れ店に行こうとするがその途中…

銀さんと護影屋、その仲間達、そして戦国武将達のドタバタギャグコメディここに開幕！

基本設定

なんでも屋 燐灯^{りんとう}

護影屋 燐灯^{りんとう}

『メンバー』

空蒼天音^{くうそうあまね}

護影屋のリーダー。

武器は木刀でかつて攘夷戦争で敵味方から『青鬼^{せいき}』と呼ばれ恐れられていた。

紅輝と2人で『双鬼^{そつぎ}』と呼ばれる。むちやくちや強い。

BASARA世界の伊達政宗と同じ魂を持つ異世界の同一人物で顔や性格はそっくり。

ただし甘味が大好き。自分に言い寄ってくるからか遊女などの女は嫌悪している（月詠などは論外）

獅童紅輝^{しどうこうき}

天音の幼馴染。

武器は棍棒でかつて攘夷戦争で敵味方から『紅鬼^{くつき}』と呼ばれ恐れられていた。

天音と2人で『双鬼^{そつぎ}』と呼ばれる。むちやくちや強い。

BASARA世界の真田幸村と同じ魂を持つ異世界の同一人物で顔や性格はそっくり。

天音や銀時とは甘味仲間。

鬼道翔^{きどうかける}

護影屋のオカンの存在（爆笑）。

武器は折りたたみ式巨大卍手裏剣で元フリーの凄腕の忍び。攘夷戦争で天音達と出会った。

元々はフリーの忍びだったが今は引退して護影屋専属の忍び。むちやくちや強い。

BASARA世界の猿飛佐助と同じ魂を持つ意世界の同一人物で顔や性格はそっくり。

新八や土方とは苦労人コンビを（無意識に）結成している。

『護影屋^{ごえいや} 燐灯^{りんとう}とは？』

その名のとおり報酬をもらいフリーの護衛をする店。

普段は万事屋と対になってなんでも屋をしている隠れ店。

ある合言葉を言うことで護影屋として依頼を受ける。

基本設定（後書き）

今回は設定、次回から本編です。

第一幕 普通に考えてトリップの仕方は大抵帰ってきたら家にいたということに

ある日、万事屋ファミリーはリビングに落ちて来た青赤茶迷彩黄紫
緑黒の服を来た人間を見て顔を引きつらせていた。

「ねえ、ここはどこ？言ってくれと俺様嬉しいな」

迷彩の男がクナイを持ちながら言う。

万事屋のオーナー、坂田銀時は頭を掻きながら言った。

「ああ？人の家の天井突き破って降って来て置いてそりやねえだろ
？っ！か何でお宅の声、高杉と似てんの？銀さん鳥肌たつからやめ
てくれない？」

「人の家壊しとして謝らないなんて最低ネ！」

万事屋の1人、神楽がそう言った。

「それはすまなかった！某は真田幸村と申す！」

「え？真田幸村って、攘夷戦争のとき戦死して今はこの世にいない
はずじゃ……」

ダメガネ
新八がそう言う。

「コラアアアアアア！ダメガネってどう言う意味だあああああ
あああああ……！」

「ナレーションにツツコんでも無駄ネ。」

「本当のことだしな。」

「テメエラ殴りたいのか!？」

新八が握りこぶしをつくる。

「HEY!小十郎、ここはどこだ？」

青い人が茶色の人に声をかける。

「政宗様、もう少しお待ちを。」

小十郎と呼ばれた茶色の方はそう言い銀時にガン飛ばして来た。

(何々?この人俺にガン飛ばして来てるよ!?!俺何かした!?)

「あのさ、俺達ここがどこか聞きたいんだけど？」

黄色の人がそう言った。

「ここは江戸ですよ？」

新八がそう言った。

「江戸?奥州じゃねえのか？」

青い人が聞いてきた。

「奥州?ずいぶん古い言い方するな兄さん。奥州あまんとつつたら天人

の侵略で別の名前に変わったじゃねえか。今は青森県って場所だぜ
?」

「なに!？」

銀時の言葉に考え込む政宗。
そして顔を上げこう言った。

「小十郎、真田。もしかしたらココは俺達のいたWorldじゃね
えかもしれない。」

「と、申しますと？」

「つまり、ここは俺達のいたWorldとは別のWorldってこ
とだ。」

「わ、わーる…?」

「世界ってことだ。おい銀髪、この世界について教えてくれないか
?」

銀時は少し考えると一連の会話から彼らが異世界人だと言っている
ということが分かった。

「わあった。その前に自己紹介だ。俺あ坂田銀時。」

「僕は志村新八ダメガネです。ってダメガネって表記止めろおおおおお
!」

「私は神楽ネ。こっちは定春!」

「俺は奥州筆頭、伊達政宗だ。」

「政宗様の右目、片倉小十郎だ。」

「俺様は「某の部下の猿飛佐助でござる！」旦那…」

「俺は風来坊、前田慶次つてね！」

「俺は西海の鬼、長曾我部元親だ！」

「毛利元就。日輪の申し子よ。」

「……」

「こっちは風魔小太郎だよ！」

それぞれが自己紹介を終える。

「新八、要点かいつまんで手早く詳しく説明してくれ。」

「結局面倒なことは僕がやるんですね…。ええっと、ゴホン！この世界は20年前に天人と呼ばれる異星人が襲来してきたんです。で、その天人を追い出そうと十数年にわたり攘夷戦争があっただんですけど、結局は幕府という偉いさん方がその天人のあまりの強さに弱腰になってしまい開国を許してしまうという事態で敗北。それからこの世界の文明は天人の技術が持ち込まれ豊かになりました。しかし一方で侍は廃刀令と言うのを出されて武士の魂である刀を取り上げられ衰退して行ってるんです。」

「何と！？」

「武士の魂である刀を取り上げるなんざ、許せねえ…！」

幸村と小十郎が声を上げ、他のメンバーも驚いている。

「つまり、この世界で我らが武器を持っていたら怪しまれるな。」

元就はそう言う。

「ん？ああ！」

神楽が声を上げた。

「そうだったアル！そういうことだったアルか！」

神楽が嬉しそうに政宗と幸村、佐助を見て言う。

「どうしたの神楽ちゃん？」

「さっきからずっと政宗と幸村と佐助が誰かに似てると思ってたアル！誰だかやっとわかったネ！」

「ああ、そう言えば！」

「なるほど、たしかに！」

神楽の言葉に銀時と新八は思いついたように言う。

「俺様達が誰に似てるって？」

「天音達ネ！政宗が天音で幸村が紅輝で佐助が翔にそっくりネ！」

「てかもう瓜二つじゃね？」

「本当、鏡を見てるみたいですよ！」

3人をマジマジと見つめる銀時達。

「天音？いったい誰だよ？」

元親が不思議そうに聞く。

「僕ら、万事屋っていう所謂何でも屋をやってるんですけど、天音さん達も僕らと対になる感じで何でも屋をやってるんです。しかも裏では護影屋って言う雇い兵みたいなこともやってる人達なんです。」

「むちゃくちゃ強くて普通の天人なんか目じゃないくらいアル！」

「昔はさつき言ってた攘夷戦争にも参加して天音と紅輝は2人合わせて双鬼とか呼ばれてたな。」

銀時達の絶賛ぶりに政宗、幸村が思ったこと。それは「戦いたい」だった。

「お前ら…行くとこないんだったら」「ここに住めば良いアル！」

「え？でも、この人数を世話するのはさすがに骨が折れるんじゃない？」

佐助の言葉で銀時達は考える。

「「「あ!」「」」」

「さっき言つてた天音達のところに住ませるってのはどうだ?」

「それアル!」

「でも、迷惑にならないかな?」

「ならあ、こつちに半分住んであつちに残りの半分が住めばいいんじゃないかね?」

銀時の提案で新八はすぐにクジを作った。

「あの、皆さん。このクジを引いてください。これで赤い色が付いていた人達は天音さんたちのところに住んでもらうということです。」

全員が黙ってクジを引いた。
そして結果が…

万事屋

・風魔小太郎

・毛利元就

・長曾我部元親

・前田慶次

何でも屋 燐灯

・伊達真田主従

「よし、決まったことだし。行くか！何でも屋燐灯へ！」

「でも、いきなり行って相手は大丈夫なのか？」

小十郎の言葉に銀時は問題なしと言う。

「あいつら、俺の頼みは結構聞いてくれるからな。」

桂などの頼みは聞かない。

銀時だから聞くのだ。

そして彼らは銀時達が借りてきた着流しなどを着用し（鎧などは後で郵便で送る）燐灯へと向かった。

そしてその途中…

「どいたどいたどいたああああああ！！！！」

長屋の屋根から何者かが銀時達の前に飛び降りてきた。

「よつと！」

それは医療用眼帯を着け紫の長い袋を背負った政宗似の青年、天音だった。

「天音さん！？」

「まさかこんなところで会っなんてな…」

天音は着地の体制から立ち上がり言葉を発する。

「oh、こいつが…」

「銀じゃねえか、どーした？」

「今からお前のところに行こうとしてたんだよ。頼みがあつてさあ。」

「

「頼み？お前から頼み事なんて雨でも振るのか…？」

「どつという意味だゴラァ！」

「jokeだjoke。んなマジになんなよ銀。いや、槍でも降るかもな（ボソリ）」

「今思いつきりバカにしたよな？バカにしたと言え！」

天音の胸ぐらを掴みかかる銀時。

「おっと！」

「ぬわ！」

天音が避け銀時は前のめりになる。

「悪いな、今は依頼の途中なんだ。これから広いところに行つて戦うも「いたぞ！逃すなああああ！」Time upか…じゃあな銀！よつと！」

天音は銀時の肩を使い倒立して向こう側へと行き走り出した。

「待ちやがれええええええええ！」

ヤクザのような男達が天音の後を追っていく。

「なるほど、天音はヤクザ退治アルか……」

「極道位の相手ならいくらいようとアイツの敵じゃねえな。ほっといて大丈夫だ。」

武將達を安心させるように銀時と神楽が言う。

「ギアアアアアアアアアアア! ! ! !」

後ろからヤクザ達の悲鳴が聞こえ思わず振り返るとヤクザが数人空中に舞っていた。

「派手に暴れてますね天音さん…」

「ヤクザ達はお気の毒アル。」

「普通のケガで済むことを祈っててやろうぜ。って、あれは…」

銀時は何かに気づいたように長屋の上を見る。

「そうでござったか。それ故に主人のもとを抜け出したのでござるか…しかし、主人は貴殿のことを大切に思う故に…わかってくださったか！では、某からも主人に注意しておきまする！」

長屋の上から赤い着物を着た幸村似の青年…紅輝が飛び降りてきた。猫を抱えて…

「む？銀時殿！」

猫を両手で抱きかかえながらタタタツと走ってくる紅輝。

「よお、紅輝。」

「この方が…！」

「どうしたアルか紅輝？」

「逃げ出した猫を捕まえていたところでござる！実はこの猫、かくしかじかの理由があつて…」

「すごいですね、猫の言葉がわかるなんて…」

「ぬ？そちらの方々は…」

紅輝は武将達に気づく。

「ああ、実はな…」

銀時は事のあらましを話す。

「なるほど、某は獅童紅輝でござる！よろしくお頼み申す！」

「でさあ、こいつら住ましていいか？」

「？某は特に問題はないでござるが…翔が何と言つか…いや、天音殿の頼みなら問題はないか…いいでござるよ！」

「サンキューアル紅輝！」

「もう帰るのでよければ共に行きましょうぞ！」

「道順同じだな。」

そして銀時達と紅輝達は歩いていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4286y/>

銀婆沙! ~ 銀の侍と蒼紅と戦国武将 ~

2011年11月17日21時38分発行